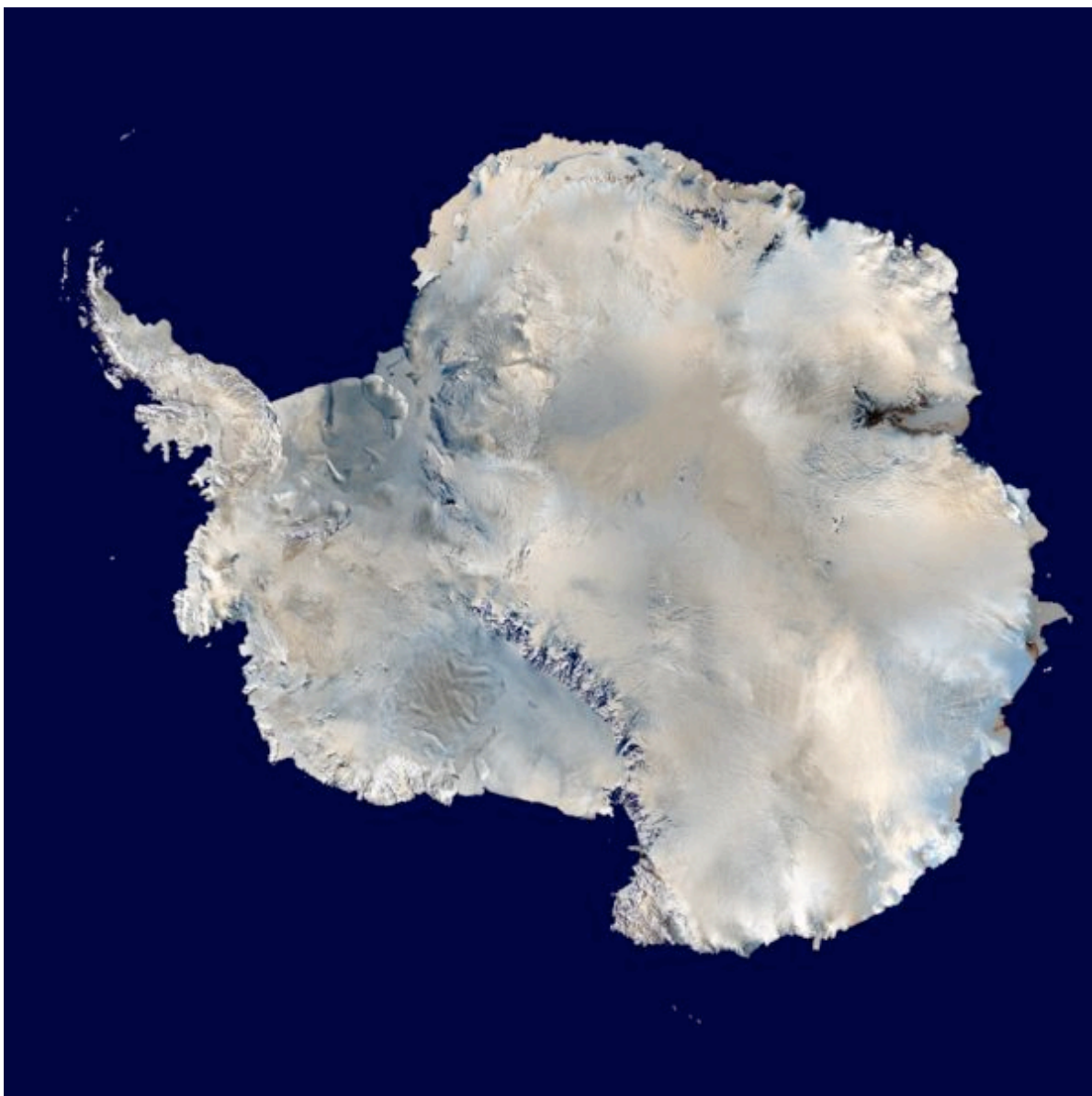


# 全ての学術の行く末、その最前線に立つ。



南極大陸。当時の小学生にとって、今の小学生が宇宙に対して感じるような未知なる興味の対象であった。

## 学術への興味のめばえ

小学生当時の校長先生が、しばしば全校集会時に南極の話をしてくれた。図書館で調べてみると、校長先生は医学・体育を専門とする第十次南極越冬隊員であった。当時の私は強く南極に憧れを感じ、それが科学への憧れへと変わった。その後、高校の同級生の父親が地球物理学を専門とする第二十八台南極越冬隊員であることを知り、南極熱が再燃。技術にも興味をもつていたため、地震を学べば南極に行けるかも? と思いつきながら、大学で耐震工学を専攻し、今に至る。残念ながら、未だ南極の地を踏んではない。

## 土木は学術の最前線?

現在の専門は耐震工学であり、土木工学の観点から研究を進めている。ここでは土木工学の視点で、学術の未来を考える。

土木と聞くと、ダムをイメージする人は多いのではないだろうか? そして、ダムはムダ。ダムは公共事業に税金の無駄遣い。最近よく耳にする構図である。土木工学は、社会のための学問として、国土を整備し、よりよい暮らしを支え、社会からも支持され、共に発展してきた。それが今や、ダムの例を挙げるまでもなく、土木というものを否定する風潮にある。



Yoshikazu Takahashi

●1970年京都府生まれ。京都大学土木工学科卒業。京都大学工学研究科を経て06年、京都大学防災研究所へ。専門は耐震工学。

つまり、ダム(問題)は、かつて繁栄した学問の行く末、なれの果ての最前線にあるといえる。ナノテクやバイオ、医療、ロボットなど、現在人々の支持を受ける学問も、ゆくゆくは支持を失い、現在の土木のような状況に陥る可能性は高い。ダム問題を克服するため活路を見出すことは、土木のみならず、学術の未来に対する希望となる。我々が「これからの土木の魅力」を認識し、社会と共有できること。それが即ち学術の未来を救うことなのだ。

## 現状認識

土木技術者、研究者は悩んでいる。自分達はもはや社会から必要とされていないのか? 公共のため、すなわち私欲を減し働いているのに、社会は敬意を払ってくれないどころかムダ扱い。その結果、土木関係者の精神はどこへ向くのか? 内向的になるばかりである。社会のための土木が、社会ではなく自身の技術・専門性により強く目を向けるようになった結果、土木のため土木となった。これが現状と乖離してしまった。これが現状であろう。

## カタカナドボク

カタカナドボクという言葉をご存じだろうか? ダムや高速道路ジャ

## 日吉ダム

### Hiyoshi Dam

淀川の総合開発の一環として、淀川水系桂川に建設された多目的ダム。1997年、京都府南丹市日吉町に計画より25年の月日をかけ完成した重力式コンクリートダム。



日吉ダム直下に立つ筆者。ダムマニア萩原雅紀氏撮影。筆者も写真を撮っているが、記録的写真の価値があるものの、人に感動を伝えるには力不足であると痛感した。専門家と国民が感動を共有できること。これがまず出発点であり、次への活力につながるであろう。



ダムマニア清水篤氏によるモノクロ写真。純粋に幾何学的な面白さを切り取り、ダムの新しい魅力を伝えてくれる。

当初、マニアの視点による土木の魅力再発見を目論んでいたのだが、実際にダム下に立つことで、純粋にその質感に圧倒された。現地でダムと対峙し、再認識したことは、このような構造物を作り出す人が、その影響力を軽視するとは考えられないことだ。自然に畏怖と畏敬の念をもちながら、人々の役に立つための構造物を作る。ダム建設に当たっては、あらゆる土木技術が総動員される。それ故、個々の専門性を俯瞰的に見渡すことができる力が必要であり、それが土木の原点の一つであろう。

技術優先でその専門性のみが強調された結果、土木の魅力も失われていったように思う。それぞれの専門性を俯瞰的に見る力を持つ研究者・技術者を再び育成することが、専門内のみ課題だけでなく、共通課題に取り組むことができる。その結果、土木の方向性と社会の要請が合致することができ、土木の復建、すなわち明るい学術の未来につながると考えている。

### 土木の原点は俯瞰的視野

リンクションなど、機能優先の構造物を「ドボク」とカタカナ表記し、マニアックに情報を収集、発信している人々がいる。彼らは専門家が持たない視点で純粋にドボクに興味を持ち、向き合ってきた。特にダムマニアと呼ばれる人たちはその数も多い。ダムマニア界で超有名人なのが萩原雅紀氏だ。その萩原氏と、先日一緒に日吉ダムへ行ってきた。